

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本と中国の諺の対照研究における文化比較：食生活に関する一部の諺を巡って
Author(s)	王, 雪
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 16期: 100 - 106
Issue Date	2002-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038895
Right	
Relation	



日本と中国の諺の対照研究における文化比較

－ 食生活に関する一部の諺を巡って －

王 雪

はじめに

日中両国は一衣帯水を隔てた隣邦であり、昔からお互いに文化を学び合い、自国の発展を図るとともに世界の文化交流にも貢献してきた。諺は言語と文化の合体で、昔中国から伝わってきたものもあるし、日本で生まれたものもある。日本人には日本人の考え方、中国人には中国人の考え方があるものの、遣隋使以前の昔から、中国の文化を吸収してきた日本人は中国的な考え方でも多分に持っているし、特に儒学的、仏教的なものの考え方には共通するものが多い。ただ、政治や生活環境の違いなどがあるため、まったく同じとは言えない。言語は文化を映していると言われるので、ここでは主に日本と中国両国民の日常の食生活に関する諺の一部を取り上げて、諺の意味構造から日中両国の文化の相違点と共通点を明らかにしたい。

米

「民以食为天（民は食をもって天となす）」という言葉があり、中国では、人に会うと、「ご飯を食べましたか」というが、これは挨拶の言葉だった。これは日本人の「こんにちは」「お元気ですか」のような言葉で、実際にご飯を食べていようがまいが、それを確かめるために言う言葉ではない。これに対して、聞かれた人は、たとえ食べていなくても、「食べました」と返事をした。中国人にせよ、日本人にせよ、主食としているのはお米である。中国語の「巧婦難為無米之炊（器用な嫁でも、米のないご飯を作ることはできない）」は当然のことで、日本語の「ない袖は振られぬ」の意として使われている。

ところで、世の中の貧富の差はまず第一に食事の面に現れる。「衣食足りて礼節を知る、衣食足りて榮辱を知る」というように生活が豊かになってこそ人は人としての礼節をわかまえることができる。

「茶来伸手、飯来開口（茶が来たら手を伸ばし、飯が来たら口を開く）」

「飯来张口、衣来伸手（飯が来たら口を開き、服が来たら手を伸ばす）」

というように、多くの人にお世話になり、食事をゆっくりとる人もいる。

しかし、「働かざるものは食うべからず」は働かない者は食べるべきではないという意味である。中国にも、「坐吃山空（坐して山をも崩す）」という諺がある。金山や銀山があつて

も、働かなければ、最後に金山や銀山は普通の山になって、食べることさえもできなくなるという意味だ。

「人多没好飯、豚多没好糠（人が多ければよい飯はなく、豚が多ければよい糠はない）」と量が多くなれば、質も落ちる傾向がある。

「吃慣的嘴、溜慣的腿（食い慣れた口、逃げなれた足）」と、中国人のユーモアはなかなか味がある。

「吃了上頓没下頓（一度食べたならその次の一食は腹ペコでいなければならない）」という十分に食べ物に恵まれない人もいる。

おながが空いたら、「空き腹にまずいものなし」と「飢不択食（おなががすいたら、何でも食べる）」とも言う。

日本では昔、「一宿一飯の恩義」などと言ったが、人に飯をたべさせてもらうことはやはりその人の恩を受けることになり、「端人家飯、服人家管（人の茶碗を持ったら、人の言いなりになる）」と「人の飯を一杯食べたら、人に使われる」とは同じ意味の諺である。

油

中華料理は世界一美味しいと言われるが、中国人は料理を作る時、よく調味料などを入れる。

「加油添酢」のような諺もある。その諺は、「油を入れ、お酢をかける」という意味ではなく、「実際にはないものをさらに付け加えて、話を大げさにする」という意味になる。

中国人は油好きで、脂っこい食べ物をよく口にする。だから油について諺もある。例えば、

「火上加油」は「火に油をかけると、もっと燃える」という意味から、「人をもっと怒らせる」や「事件をさらにひどくする」という転義になる。

「油嘴滑舌」は、うまい話で人を騙す時や、冗談気味の時にも使われることがある。中国人と違い、脂っこいものをあまり食べてこなかった日本人にとっては、それらを食べ慣れている中国人と、食物に対する観念が相当違っていることは否定できない。しかし、日本でも次の例のように油についての諺は作られた。

「油が乗る（物事が十分に熟した時を迎えたり、調子が出て活気付いたりすることのたとえ）」

「油紙に火のついたよう（べらべらとよくしゃべるようすの形容）」

「油に水（互いに気が合わずに打ち解けないことの喩え）」

「油を売る（仕事の途中などで、無駄話をして怠けること）」

「油を絞る（人の失敗や欠点を厳しくとがめだてて、とっちめることのたとえ）」

「油を持って油煙を落とす（油を使って油煙を落とすように、同種・同類のものをうまく利用して効果をあげることのたとえ）」

以上の諺からして、油の諺はあまりいいイメージがないようである。一見したところ日本

人の日常生活では、油をあまり使わないようであるが、実際に中国の諺に負けないぐらい油が諺に反映されている。

酒

酒については、中国でも昔はこれを<福水>と言ったり、<福泉>といたりしているように賛否両論がある。

「不可不飲、不可太飲（飲まざるべからず、飲みすぎべからず）」が常識的な言葉であろう。

「有錢有酒必有朋友（金と酒があれば必ず友あり）」

「煙酒不分家（たばこと酒はわけ隔てしない）」

のような諺はそんなに良い意味ではないと思う。中国人は友達との間柄を大切にしているのである。友達との付き合いは食べたり、飲んだりしながら、友情を深めるケースが多いようである。

「酒逢知己千杯少、話不投機半句多（酒は知己に逢えば千杯でも少なく、話は調子が合わなかったら半口でも多すぎる）」と肝胆相照らせば一晩でも飲み明かし、話の合わない人とは一言も話したくないという率直な気性を持っている中国人が多い。

しかし、

「酒能成事、也能敗事（酒はよくことを成し、よくことを破る）」という諺もある。

「酔翁之意不在酒（酒を飲むおじいさんの意は酒にあらず）」は酒に程よく酔って、美しい山水の風景に心を馳せることであったが、いまでは、酒を飲んで酔ったふりをしている人の本当の目的は酒以外にある。日本では「敵は本能寺にあり」の意として使うこともある。飲み過ぎたり、食べ過ぎたりして吐いたのを日本では「小間物屋を開業」などと言うが、中国には、「開當舖（質屋を開業）」という言い方もある。

ところで、「今朝有酒今朝醉、明日愁来明日当（今日酒あれば今日を酔い、明日の心配事は明日のこと）」という現実的な考え方はいまに始まったことではない。

「君子喝酒沈沈醉、小人喝酒乱颠狂（君子は酒を飲めば沈沈として酔い、小人酒を飲めば乱れ狂う）」と酔った後の君子と小人の違いを述べているが、「唯酒無量、不及乱（ただ酒に量なく、乱れるに及ばず）」といくらでも飲めるが、正気のままに乱れないのが、ほんとの酒飲みである。日本は「酔っ払い天国」と言われるが、中国では昔から、酔っ払いが道でヒョロヒョロしているのはほとんど見かけなかった。今の中国ではなおさらのことで、酒を飲む人はいても、飲まれる人はいないと言われている。これは酒に強いだけでなく、飲む人の心がけの問題である。

宴席では「酒令」と言って、罰杯などのような遊戯が行われたが、日本のように自分の杯で人に酒を勧めることは絶対にしない。古くから宴席での毒殺を避けるための警戒や相手に安心させる意味もあるのであろうが、そんなことは考えたこともない、日本人の天下

太平さも、ある面から考えると、まったく在り難い事と言えるかもしれない。日本では、このような諺もある。

「酒買って尻切られる（酒を振舞って、かえって乱暴される。恩を仇で報いられることのとえ）」

「酒酔い本性忘れず（酒に酔ってもその人本来の性質は変わらない）」

「酒は憂いはらう玉帯（酒は心配や憂いを除き去り、忘れさせてくれるものだ）」

「酒は百薬の長（適度な酒はどんな薬にも勝る効果があるという意）」

食用の動物

「山に近ければ山で食べ、水に近ければ水で食べる」

という諺どおり、人間は自分のいる環境で生きてゆくのが普通で、自然である。日本は海に囲まれ、海の幸に恵まれた民族と言われる。これに対して、中国は一面だけ海に臨み、三面が大陸に囲まれた国である。広い中国にとって、海の文化より陸の文化がもっと適切ではないかと思う。そこで、日本人は植物や魚類を上手にを使って、色や香りで食べ、中国人は動物性のものを巧みに料理して、味で食べると言えよう。魚についての諺は中国より極めて多い。逆に中国語では陸地の動物についての諺が多い。

例を挙げると、日本では

「鯛で精進落ち（せっかくながまんしてきたのに報いられない、つまらないという意）」

「鯛の頭も信心から（鯛の頭のようなものでも、信仰すると、ひどくありがたく思える）」

「鯛の尾より鯛の頭（大きい団体で人の尻に付き従うよりも、小さい団体でもその長となれの意）」

「魚は鯛（魚類中、一番味のよいのは鯛であるように、その類の中でもっとも優れているものの意）」

「海老で鯛を釣る（わずかの労力によって多くの利益を得る）」

「海老の鯛交じり（弱者・愚者が強者・賢者の中に入っていることのとえ）」

「腐っても鯛（本来優れた価値をもつものは落ちぶれてもそれなりの値打ちがあることのとえ）」

「蟹の穴入り（慌てふためくさまのとえ）」

「蟹の念仏（口の中でぶつぶつぶやくこと）」

「逃がした魚が大きい（手に入れそなたものは実際よりも立派に思われるものだ）」
などの海の魚について諺が多いのに対して、中国人は農耕民族で昔から牛を使って田を耕したり、馬を交通道具として使ってきたので、次の例のように「馬」や「牛」の諺が多い。

「人有失錯、馬有漏蹄（人には誤りがあり、馬には蹄の外れることがある）」

「東風吹馬耳（馬耳東風）」

「牛頭不對馬（牛の頭と馬の口とでは合わない）」

「初生牛 不怯虎（生まれたばかりの子牛は虎を恐れない）」

「牛に向かって琴を弾ずる（馬の耳に念仏の意味にあたる）」

これらの諺はそれぞれの国の文化を反映していると言えよう。日本人は陸地動物より海の魚類の方をよく食べてきたと思われるし、牛などを道具として使ったり、食物として食べたりするのは中国人の方が日本人より多いと言えるだろう。

食べなれていないものでも、美味しいと聞くとほうっておけないこともある。

「河豚は食いたし命が惜しし」は日本も中国も同じことらしい。

河豚は中国でも美味なものとされて、

「不吃河豚不知魚味（河豚を食わずしてどうして魚の味が分かつるか）」

という言葉が古くからあり、「死吃河豚（命がけで河豚を食う）」などとも言う。

箸

ご飯もあり、料理もあれば、次になくてはならないものは食器である。勿論手で食べるのがいけないことはないが、清潔度と能率の面から言えば、やはり食器を使って、食べた方がいい。食器の中で、まず箸が大切な道具であることは言うまでもない。歴史の長い中国は箸文化の国と言っても過言ではないだろう。二本の細長い木の棒を右手に持って、小さいものから、丸いものまで全部挟める中国人にとって、巧みに使うのは日常茶飯事のことであるが、箸を使わない国の人にとって、箸で食物を取ることは難しいようだ。日本は最近ヨーロッパやアメリカの文化の影響によって、フォークやナイフなどを盛んに使うようになったのであるが、しかし箸はやはり日本民族にとって、かけがえのないものである。但し、中国人の食生活と異なり、日本人は新鮮な生の魚などを食べることが多いので、箸も賢い日本人によって改造された。刺身などを取りやすくするために、箸の一端がさらに尖っているようになった。当然箸で何でも取るわけではないが、例えば、このような諺がある。

「箸にも棒にもかからぬ（どうにも取り扱えないことのたとえと何の取り柄もないことの喩え）」

短くて細い箸でも、また逆に、長くて太い棒でも、取り扱うことができないということから出てきたようだが、中国にも、類似する表現がある。

「四季豆不進油塩（四季豆には油と塩が入れられない、転義して、人の話を聞き入れないことの喩え）」

「四季豆」は豆の一種で、昔からは油や塩などの調味料をかけても、なかなか豆の中に浸し込むのが難しいと言われていた。そういう意味から、「煮ても焼いても食えぬ」の意味に当たると言えるだろう。

また、「箸より重いものを持ったことのない」というような諺もある。

中国には

「肩不能挑、手不能提（肩で担ぐこともできないし、手で持つこともできないの意味）」という諺があるが、意味としては一緒である。即ち、裕福な家で大事に育てられ、労働したことのないことを言う。今の若い子達は皆家族に甘やかされ、世間のことも知らず、家事もできない。結局、社会に出ると、一から勉強し始め、大人になっても、子供のような考え方を持っている人が多い。さて、若い子について、このような諺もある。

「箸が転んでも可らしい（日常のありふれたことに、可らしいものを見たように笑い転げること）」

この諺は食卓の上にあるいつも使っている箸が何かの拍子に転がったのを見て笑い出すということから、いまは十代後半の情感豊かな女の子の表情について言うことが多い。

残念ながら、中国では箸について諺はそれほど多くないようである。箸文化をもっと発展させ、食文化というガーデンに花を咲かせよう。

健康

昔は「病は口より入る」と、病気は飲食物から起きる場合が多かった。中国人はひどい病気ではない限り、なるべく病院へ行かないようにする傾向がある。

「是薬毒三分（薬はすべて三分は毒）」

という。病気になったとしても、薬を飲むより身体をゆっくり休めるほうが、治り方としてはより自然だと思われる。

所謂

「三分服薬、七分調理（三分の薬餌に七分の保養）」

である。と同時に、中国人は日常の食事において、よくバランスを取っている。普段健康に気を配っている中国人は特にスープを好み、スープにはビタミンや蛋白質など身体に必要な栄養分のエッセンスが含まれていると信じ込んでいる。

「吃飯前、先喝湯、強如請藥方（ご飯の前にスープを飲めば、医者薬を飲まずに済む）」
加えて、野菜や豆腐の役目も強調しているようである。

「魚生火、肉生痰、白菜豆腐、保平安（魚を食べると、のぼせ、肉を食べると、痰が出るが、白菜、豆腐で無病息災）」

日本では昔から、「ご飯を食べてすぐ寝ると、牛になる」などと言ったが、中国では

「飯後百歩走、生到九十九（食後百歩歩いたら、九十九まで生きられる）」

「晩飯少吃一口、活到九十九（夜の食事を控えめにすれば、長命疑いなし）」

「飯後一個果、神仙不如我（食後に果物を一つ食べたら、神様より楽しくて、健康だ）」
などという。また、「腹八分目医者要らず」というように、中国にも「飯吃八分飽医生不用」という韻を踏む諺がある。飲食や健康については全世界にわたって、皆同じ考えを持っているのだろう。

終わりに

諺には古くからの人生の知恵を表現した言葉の技や、処世のための短い有効な教訓などの、さまざまな意味付けがなされてきた。諺は多くのジャンルにわたって、凝縮し、洗練された言葉遣いで人間の全てを扱っている。中国では、諺は普通、書き言葉で〈諺語〉と言い、口語では〈俗語〉と言うが、本稿では、日中両国の食生活に関する一部の諺を扱い、両国の文化の相違点について考察をおこなってきた。諺には意味的にあまり変わらないが、形式的に異なっているものがある。その底に中国人らしい気持ちや考え方が流れていて、極めて興味深いものがある。日中における諺の対照研究は言葉の表し方の違いを究明するだけでなく、文化、心理、宗教信仰の違いをも解明することができる。日中関係が発展している今日は各方面で異質文化の比較を行うことが是非とも必要だと思う。

参考文献

- 田中清一郎 『中国の俗諺』 白水社
谷沢永一 『日本の知恵を知る故事諺』 講談社
飛田良文 呂 玉新 『日本・中国慣用語対照辞典』 南雲堂
藤江在史 『言葉から見た中国』 自治日報社
時田昌瑞 『岩波ことわざ辞典』 岩波書店